昭和二十三年十月一日印刷
昭和二十三年十月五日發行
昭和二十四年十一月二十五日再版發行

中島敦全集 第三卷
定價 參百八拾圓
地方賣價 四百圓

著者 中島敦
發行者 東京都文京區台町九 古田晁
印刷者 東京都新宿區市谷加賀町一ノ一三 小坂孟
發行所 株式會社 筑摩書房
東京都文京區台町九
電話小石川(〇〇五一)番(業務)
二〇五七番(編輯)
振替口座 東京一六五七六八

大日本印刷株式會社印刷・鈴木製本

中島敦全集

第三卷

目　次

一　北方行……5
一　ブウルの傍で……127
無題……152
一　下田の女……173
ある生活……186
一　喧嘩……196
蕨・竹・老人……204
巡査の居る風景……222
D市七月敍景……239

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

歌稿　その他

和歌でない歌……266
河馬……274
Miscellany……284
霧・ワルツ・ぎんがみ……294
Mes Virtuoses……303
朱塔……307
小笠原紀行……313
譯詩（Thomas Moore : The Light of Other Days）……322
漢詩……325
章魚木の下で（絶筆）……336
編集後記……339

北方行

第一篇

二

（朝・黒木三造は渤海灣の潮風に吹かれて甲板の通風筒に靠れてゐる。風は可成強く、波は時々甲板に打揚つて彼の足許に飛沫をとばす。曇り日の海面は鉛色に涯しなく擴がり、朝の光の鈍い白さがその上を流れる。まだ夏ではありながら、何かしら冬に近い冷えゞ〳〵としたものが感じられる。旅の初めに誰でもが感じる漠とした不安と期待とに輕い興奮を覺えながら、三造はぼんやり果もなく打續いた波頭の群を眺めてゐる中に、いつか、今航海してゐる此の海がバルティック海か北海か、とにかく何か北歐の海ででもあるやうな錯覺に陷つてゐた。昨夜暗いペンキ臭い船室の隅で讀んだトニオ・クレエゲルが頭に殘つてゐたせゐであらうか。又、白つぽい海面にひろがつた此の秋のやうな冷たさが、彼の何處かにある北歐的なるものへの思慕を呼びさましたからであらうか。とにかく彼は大きな黄色いパイプに似た通風筒に靠れたまゝ、何か起るに違ひない、生活の殘渣と自己の中の挾雜物とを掃出してくれる何かが、自分にほんたうの空氣を吸はせてく

れる何かが現れてくるであらう、といふ期待とも豫感ともつかぬものに心を轟かせながら、今にストックホルムか、コペンハーゲンにでも着くやうな氣でゐた。)

此の半年程の間、彼は彼が今迄何年かかゝつて自分の中に造り上げ、畫き上げた樣々の藝術家達の肖像を、あるひは打毀し、あるひは壁から取外すことに努めてゐた。ボオドレエル、アナトオル・フランス、ウォルタアー・ペエタア、エドガア・ポオ、オスカア・ワイルド、スティヴンスン、リスト、レオパルディ、三造は彼等を棄てようとした。(もしくは彼等が三造をすてようとした。)彼等ばかりではない。もつと古典的な、もつと健康な人達からも、彼は次第に遠ざかつて行つた。すべてが彼から去つたあとに、たゞ、モツァルトだけが殘つた。彼はモツァルトを愛した。故鄕から遁走する、あるひは故鄕から追放された人間の、故鄕に對する最後の愛情を以て、彼は彼のモツァルトを愛した。彼がもし、いつか藝術によつて救はれることがあるとすれば、——そんなことはない。そんなことがあつてたまるものかと彼は今、固く思ふのであるが——もし萬一、さういふことがあるとすれば、それはモツァルトの音樂によつてであらうと彼は考へてゐる。いや、考へてゐるのではない。そんなことは意識しては考へもしないにも係らず、心の何處かで、さういふ風に本能的に感じてゐるのである。さういへば、どうやら昨夕の夢にも、波とエンヂンの響に交つて、ドン・ジョヴンニが響いてゐたのではなかつたか。

(昨夕も彼は長いこと、甲板に出て荒い潮風と飛沫とに身をさらしてゐた。今朝もかうして强い風にさからつて立つてゐる。何かはげしいもの、强いもの、兇暴なもの、嵐のやうなものに、彼はぐつとぶつつかつて行きたいのである。さうすることによつて、自分の身にくつついて、自分を不具者にしてゐる殼(一つの制限の中にとぢこめてゐ)を叩きつ

ぶしたいのである。渤海灣は淺いので、少し風が吹くと、すぐに浪が立つ。船はかなり搖れる。船の動搖と、濕氣を含んだ烈風と、しぶきと、灰色に擴がつた曇り日の空と水の肅殺たる風景との間に立つて、彼は、今とそ自分の古いセンティメントの殘渣が遠く遁逃し去るのを、快く感じてゐた。)

いつのころからか、彼は、自分と現實との間に薄い膜が張られてゐるのを見出すやうになつた。そして、その膜は次第に、そして、つひには、打破り難いまでに厚いものになつて行つた。彼は、その、塞天質のやうに視力を屈折させる力をもつ、半透明な膜をとほしてしか、現實を見ることができなくなつて了つた。彼は、ものに、現實に、直接觸れることができない。彼がものに觸れ、ものを見、又は行爲する場合、それは、彼の影がものに觸れ、ものを見、又は行爲するのである。彼はこのことを發見した。が、奇妙なことに、この意識は最初の中、彼に滿足を與へてゐた。これこそは、文明人の、乃至は知識人の、最後の資格であるといふふうに考へられたのであつた。その中に、しかし、彼は、やうやく、自分が、このやうにして、二進も三進も行かないどんぞこの泥濘に陷つてゐたことに氣がつきはじめた。その時、自分が不知不識の中に、いや、むしろ得意然として、進んで行つたその路が、如何に、救ひやうのない頽廢に爛れてゐたか、如何に混沌たる迷蒙に陷つてゐたか、如何に有毒な瘴氣につつまれてゐたかを見出して彼は慄然としたのであつた。自分とは何だ。現實とは何だ。そんなことは誰にも分りはしない。が、少くとも現在の三造にとつて、現實とは、今自分のふれてゐるものではないことは確かだつたし、又、自分の行爲は、すべて自分の行爲ではなく、自分の影の行爲に過ぎないことも、それと同じやうに確かであつた。彼はこの膜をつき破らうとした。彼はどうにかしてこの影を投げうたうとした。彼はこの殼から脫け出さうとした。どんな惡魔でもいい。も

しも、それを買ひにくるものがあれば、彼は喜んでその影を賣渡したであらう。たとひ、ペエタア・シュレミイルのやうに、あとでどのやうに後悔しようとも、そんなことは彼の知つたことではない。現在この瞬間彼はどうしてもさうせずにはゐられないのである。それほど彼は、この三四年の間、彼を喜ばせ、彼を醉はせてゐた一切のものからの脫走にいらだつてゐたのであつた。

生きてゐる、とは、どういふことか。人はそれを知ることはできない。只、感じ得るばかりだ。そして、その眞實の生命の焰を常に全身の脈管に感じつゝ、生きて行く事こそ、人間の、といふよりは生物の、——理窟も何もない——本然なのではないか。（このやうな思ひ上つた大掛りな言ひ方をさへ、今の——滿二十一歲と四ケ月の三造は恥づかしいと思はない。彼にはむしろ、言葉といふものの、非直接的な表現能力がまだるつこいのだ。「眞實」といひ、「生命」といひ、これらが事實そのものに比べて、何といふ空疎な概念的な響しか傳へないことか。）これも今迄の生活の惰性でつぱりものを斷言できない習慣になつてゐる彼ではあるが、此のことだけははつきり言へさうな氣がするのである。いかに子供つぽい人道主義的自覺と哂はれようとも、これぱつかりは眞實であると彼は思ふのである。さうだ。これこそは證明を要しない唯一無二の生活上の要請だ。今まで自分は一體何といふ怪物だつたらう。いや自分ばかりではない。世界は何といふ怪物に充ちてゐることか。青褪めた魂しか持つてゐない痩せ果てた亡靈共。頭腦ばかり無闇に大きくなりすぎた榮養不良の餓鬼共。

黑木三造は今迄生きて行く眞似ばかりしてゐた。決して彼自ら直接に生きたことはない。一體此の墮落は何時から始まつたか。

（夜が明けはなれたのか、茫漠たる灰碧色の風景の奥から、稍〻明る味を帶びた白さが次第に明るく射してくるやうであつた。天津へはあと三時間ばかりであらう。白河の泥土の爲か、海水も黄白の濁りを著しく加へてきた。三造は凝然と天際を見詰めたまま考へ續ける。）

（「自分は作家となるやうに生れついてゐる。誰が何といはうと、それは定つてゐるのだ。」といふ、）今から考へて見て、如何にも呪はしく愚かしい不思議なかうした心構は、何時頃から生じたものか。（彼の中に根は張り始めたものか）あるひは、小學校の作文の成績の良かつたことから發したかも知れない此の妙な自覺、不思議な宿命觀からして、凡ての害惡が生じたのだ。「無用の讀書」「無用の放恣」「無用の怠惰」そして最後に「思索のための思索」「觀察のための觀察」。これらのすべてが、この「自分は作家（人生カン賞家たる）になるやうに運命づけられてゐる」といふ奇妙な自覺と、「藝術こそは人生に於て最も崇高なものである」といふ浪漫的な偏見から生れたのである。彼は、もはや、一つの概念――人工的な概念を通じてでなくては何物をも感ずることができなくなり、エピキュリアン的完成に資する所あらうとする目的を抱くことなしには、何物をも觀察することができなくなつてゐる。これが、病の中の最大の病。不具の中の最惡の不具でなくして何であらう。自分の戀愛を見るがいい。自分はかつて、純粹な戀情に燃えたことがあつたか。末梢的な好奇心と、觀察的の興味なしに、異性との交渉を持つたことがあつたか。又、自分が童貞を破つた時のことを考へて見るがいい。あれが果して本能の策勵であらうか。彼はその後「赤と黑」を讀んで、その主人公の最初の冒險と、自分のそれとがあまりによく似てゐるのに驚いた。すべての人は、みな自らの中にジュリアン・ソレルを見出す、などといふ批評家に言ひ古るされたやうな意味ではない。その時に、彼のとつた行動――內的な心理のみならず、外的な行爲、それ自身

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

が、ジュリアンのそれと全然同一だつたのである。その時、彼は、自分が未經驗であると思はれるのを恥ぢ、あらゆる愼重な用意を以て、自分がかかる經驗を多分に持つてゐるかの如くに振舞つた。そして、その完全な落着きを以て、相手に充分、それを信じさせることができたのである。それは凡て、書物によつて養はれた彼の想像力と、それに基く、周到に用意された計算との結果であつた。あゝ、その時の自分の顔眼が何といふみすぼらしい虛榮に充ちてゐたことか。みすかされはしなかつたかといふ怯れに何と充たされてゐたことか。かうして自分は未だ戀愛といふもの、いや、肉體の樂しみそのものさへ味つたことがないではないか。

さう考へてくると、彼には自分の今までが、とりかへしのつかない時間の浪費に思はれてきて、たへがたい焦躁を感じるのであつた。まるで今まで自分は生きてゐなかつたのとおんなじだ。さう思ふ時、彼は心の中に、「分析的精神の撲滅」といふスロオガンを高々と掲げて自分を安心させ激勵しようとする。一つの行爲や思考をしてゐる最中に「自分は今かく〳〵の行爲をしつゝある、これ〳〵の思考をしつゝある」といふ意識を追拂ふこと。これが先づ一番大事なことだ。實際彼の意識は、よく理髪店(とこや)でみるやうに、部屋の兩側に二つの大きな鏡を向ひあはせておく場合に似てゐた。一つの鏡の中には、それを寫してゐる他の鏡があり、その初めの鏡の中にある第二の鏡の中にも、はじめの鏡がうつされ、更にその鏡の中に、無數の、それ自身と他とをうつした鏡が重なり合つてゐる。そのやうに　……(原稿三枚紛失)……

晝間食堂で隣合つた、頸のつけ根の所に拳大の瘤をもつた中年の支那人のことを憶出した。その男はでつぷ

り太つた商人風の男で、彼の隣で默々とオムレツをつゝいてゐた。その男の左の頸のつけねに直徑十糎近くもありさうなこぶが盛上つてゐたのであつた。彼はそのこぶを見て驚くと同時に、へんに脅されるやうなものを感じた。テカ〳〵と赤く光り、彼とはまるで獨立した意地の惡い存在のやうに、その男の襟の上に盛上つてゐる。そして、今までもそこにあり、これからもそこを離れることのない、その肉塊が、彼に宿命といふことを感じさせ、彼を恐怖におひやつた。不快な彼は、その不氣味な肉塊によつて象徴される「人間の自由意志の否定」といふ事を考へつゞけたのであつた。（欄外餘白ニ鉛筆ニテ）（かういふ疑惑や恐怖に襲はれる時、彼はそれを生命力の衰退の兆候だと思つて、それを排しのけようとする。世界はあるがまゝに、全的に考察されるべきだ、決して個々に分析さるべきではない。が、さう思はうとすればするほど、この奇妙な恐怖と執拗にからんでくるのである。）

仔猫の遊戯と瘤の聯想とが先程までの彼の氣持のよい興奮を「幻滅」にまで引きもどさうとしてゐることにふと、彼は氣がついた。さうしてあわてゝ、もとの感情の昂揚狀態に立ちかへらうとした。かういふ昂揚された精神の狀態を彼はどんなに望んでゐたことであらう。彼の生活に缺けてゐるのは、何よりも、かうした生に對する感激であつた。それは彼に現れる事が珍らしかつたゞけ、それだけ貴く思はれた。全く、さうした感激が、彼を訪れる事は珍らしかつた。たまにやつて來ても暫くすると、いきの拔けた風船のやうに、それはしぼんで了ひ、あとには、たゞ、かくもお手輕に感激を催したといふその輕率——大人氣なさに對する苦い後悔が殘るだけなのだ。生に對する激情が、後悔と羞恥とを以て扱はれなければならないとは、一體何といふ事だらう。恐らくは、これも、物に動じない事を以て修養の要諦とした東洋的教育の殘滓かもしれな

かつた。とにかく、彼にあつては、一時感情の興奮を以て考へたことは、あとで必ず、その反動として否定され、羞恥を以て思返されるのだ。それで、そのために、その感動の最中にあつてすら、「後々の幻滅のにがにがしさをより少くするために、自分は、この現在の感動を加減しなければならないのかな。」と考へる事が多い位であつた。だから、實は先程から、明方の海を見渡しながらの、快い精神の昂揚の中にあつても、彼の中のもう一人の彼は心の隈で「警戒しろ。」と叫んでゐたのである。「警戒しろ！　今感じてゐるやうな興奮も旅のはじめとか、海の上とか船のペンキの匂とか、さういつた周圍を切離して了へば結局何の魅力もない、一時のつまらない興奮にすぎないかも知れないんだぞ。」

もう一人の彼はしかし、それをきくと、恐怖の身振でもつて、それをもみけさうとした。「しかし後で悔いるだらう事を考慮に入れて、そのために現在の感動を抑へようとするのは、一體どういふことであるか。」（と、彼はさう抗議した。）不斷の瞬間々々にさういふ反省と抑制と躊躇とを繰返してゐるとすれば、その人間は生きた現在といふものをつひに持ち得るであらうか。全く彼にはどうしていゝか分らないのだ。一つのものに感動する。やがて、その感動が恥づかしく思はれてきてそれを後悔する。と、又、その後悔それ自身が「自己分析の過剰」と「燃燒性の不足」に對する不滿をいらだたしく彼に感じさせるのだ。彼には如何なる感情も思考も永續きがしない。一つの感情の次にはそれを忌はしく思はせる他の感情が、一つの考への次には、それを滑稽に思はせる他の考へが、そして、それ等二番目のものの次には更に、それ等の反動が――といふ風に常に移り動いて止まないのである。これも今迄のいま〳〵しい繁瑣な形式的な自己教育の結果なのだ、自ら祕かにほこりとしてゐた今迄の自己修養は一體何といふ結果をもたらしたことだ。……彼は腹

立たしく思ひ、どうせ自分の中に反動が、更に反動の反動が、又、その反動が起る位なら、はじめからそんなものに、來るべき反動に對する顧慮なんかしない方がいい。たとへ習慣と、生得の性質とからして、神經質な顧慮が、いかに必然的についてまはらうとも、そんなものは頭からはねつけて了ふのだ。サイレンの前であらかじめ自分の身體を縛つた利口な男のやうに、自分も無限の反復的顧慮の前に自分をしばらねばならぬ。たとへ、どのやうに、それへの誘惑を感じても、又、どのやうに、その瞬間々々に於ては、それが必然に思はれようとも、一度それに身を委せれば、必らず後で後悔しなければなるぞ、と、さう自分にいひきかせて、さて、彼は自分の前に出てくる現在といふやつをつかまへようと思ふのだ。その現在といふやつが、如何に醜悪で、又それを受取る自分といふものが如何に未熟でも構はない。とにかく自分は現實と握手をするのに（決闘ならば、いふまでもない。）手袋をはめてゐたくないのだ。未熟は決して恥づべき事ではない。少くとも未熟を隠す事よりは……三造はやつと、さう自らを説得することができた。

三

大跨の足音が聞えて彼は後から呼びかけられた。'Good morning.'

彼は折角續けてゐた考へを中斷された事をいま〳〵しく思ひながら、同じ言葉で挨拶をかへして後を向いた。

英國人にしては隨分背の低い、が、健康さうに赤く日焼のした顔、白い頸から赤い顔へと、その境目の如

何にもはつきりした元氣のいゝ顏が笑つてゐた。

「何を考へてゐますか？　哲學者先生。」

Thomson は手にした紙片を苦笑してゐる三造の前に出して言つた。

「此のニュウス、説明して下さい。どうぞ。」

彼はできるだけ日本語で用を足さうとした。三造が英語を使はうとすると、彼は何時もあわてゝ、それを止めた。「わたくし、損をします、わたくし日本語覺えません。」

三造の日本語の生徒。大英海軍（何と彼が誇らしげに、はつきりと、British navyと發音したか。）主計少佐。日本への交換留學生。背がひくく、赤い顏をした、髪の毛の薄い、少しばかり短氣で、子供つぽく、精力絶倫で、至つて正直な、だが、有色民族の前で、彼等に對する侮蔑を隱すこと位は禮儀（又しても大英國紳士の禮儀）として心得てゐる Richard Thomson.

彼が三造へ渡したのは今朝配られた船中ニュウスであつた。

（欄外餘白ニ）

（昨夜の太原會議に於て閻錫山氏は新政府主席就任を受諾した。」「何健軍は一戰をも交へずして長沙を放擲、共產軍再び長沙に迫る。」）

一九三〇年、夏の終りのことで、南京政府と北方の軍閥との間の抗爭がその頂點に達しようとしてゐた。そのニュウスも場所柄だけに、その支那の內亂か又は南方の共產軍蜂起に關するものばかりであつた。三造の大ざつぱな翻譯を（彼の說明なしでも大抵は意味がとれるのではあつたが）トムソンはにこ〳〵しながら聞いてゐた。

「面白いですね。北平で戰爭になると面白い。」彼は支那の問題については、何も特別な見解も持つてゐないやうに見えた。戰爭といふものに對する軍人らしい興味と、支那の國民性の不可解に對する平凡な慨嘆とし か、持合せてゐないやうであつた。少くとも日本人——支那に對して、最も多くの野望をもつてゐる日本人の一人である三造の前では、それ以上の見解を示さうとはしなかつた。

「支那は大きい。非常に大きい。が、非常に馬鹿です。彼等は。」

これは一體、「日本は小さい。併し、非常に利口です。」といふお世辭のつもりであらうか。と、三造は考へた。もし、そんなお世辭によつて三造自身が——忠君愛國者の一人に違ひない三造が喜ばされるだらうと考へてゐるなら、自分と一年近くも交際つてゐるくせに、此の男は何といふ馬鹿だらう、と三造は思つた。

四

去年の秋の初め、三造は一人で、輕井澤から碓氷峠への道をのぼつて行つた。紅葉にはまだ少し間のある頃だつたが、木々の葉の中には、ボツ〳〵黃色や赤に色づきかけてゐるのも交つてゐた。夏服を持つてゐない彼は紺の冬の學生服を着、帽子をとつて、それで顏をあふぎながら一歩々々ゆつくり上つて行つた。その坂の途中で、茶の中折に、同じ色の服を着けた小柄な外人が彼におひつきざまに聲をかけた。

'Hay, young man, is this the way to the Panorama place?'

三造は、だが、その精悍さうなあから顏を見返すと、反射的に烈しい口調で言返した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com